

11 結果

冠動脈疾患の危険因子は家族歴・高脂血症・高血圧・喫煙・精神的ストレス・社会的低層階級・糖尿病である。高血圧性では蛋白尿も重要である。卒中の危険因子は家族歴・血圧・喫煙・高ウエスト/ヒップ比・高フィブリノゲン血症・精神的ストレス・蛋白尿・心房細動・一過性脳虚血発作、うっ血性心不全では高血圧・喫煙・高ウエスト/ヒップ比・精神的ストレスが危険因子であった。収縮期血圧は家族歴・心拍数・コレステロール値・BMI・社会階層・糖尿病と相剰関係を認めた。干渉を行うことによって発生率は低下する傾向がある。

12 結論

高血圧と喫煙は冠動脈疾患・卒中・うっ血性心不全・全死亡率に影響を与える危険因子と認められた。高脂血症・肥満・精神的ストレス・糖尿病はそれぞれの疾患で異なった。

13 要約

冠動脈疾患、卒中、うっ血性心不全の危険因子と死亡率についてはスウェーデンのエーテボリで50歳男性と47-55歳の2つを母集団にした後向き研究が行われている。上記疾患の潜在的危険因子の系列は単体そして複数のロジスティック分析の結果から述べられてきた。母集団に帰因すべきリスクについても推測されている。多変数解析によって重要な危険因子がまとめられている。冠動脈疾患では家族歴・高脂血症・高血圧・喫煙・精神的ストレス・社会的低層階級・糖尿病である。高血圧性では蛋白尿の確認も重要である。卒中の危険因子は家族歴・血圧・喫煙・高ウエスト/ヒップ比・高フィブリノゲン血症・精神的ストレス・蛋白尿・心房細動・一過性脳虚血発作。うっ血性心不全では高血圧・喫煙・高ウエスト/ヒップ比・精神的ストレスが危険因子であった。

文献ID 66

1 著者

Yasuda A, Iwasaki K, Sasaki T, Oka T, Hisanaga N

2 タイトル

Lower percentage of CD 65+cell associated with long working hours
長時間労働と CD56+cell 割合低下の関係

3 掲載誌

Ind Health 39: 221-223, 2001

4 デザイン

断面研究

5 目的

勤務時間、睡眠時間と免疫学的指標の関係調査

6 曝露指標

勤務時間、睡眠時間(質問紙法による自己申告。仕事時間は拘束時間+通勤時間の半分としている。

7 結果指標

採血による CD56+cell の割合

8 比較指標

勤務時間と睡眠時間を 3 段階に分類し、それぞれのグループの CD56+cell の割合を one-way ANOVA にて分析

9 実施国

日本

10 対象

同じ科学技術先端企業において同一健診を受けている 197 人の日本人で、治療を受けていない、質問に答えてくれた 21-64 歳までの 142 人

11 結果

1 週間の勤務時間が 55-64.9 時間、65 時間以上の方は 55 時間以下の方に比べて CD56+cell の割合が有意に低下していた。1 日の睡眠時間が 6 時間未満の方は 8 時間以上の方に比べて CD56+cell の割合が有意に低下していた。勤務時間・睡眠時間・年齢・喫煙状態で多重分析したところ、喫煙も CD56+cell の割合低下に関係していた。

12 結論

CD56+cell は他の CD4+,CD8+ に比べて鋭敏に勤務時間、睡眠時間に反応した。免疫学的に CD56+cell は長時間労働のモニタリングの指標として役に立つ可能性があると思われた。

13 要約

科学技術先端企業で働く 142 人の研究で、CD56+cell の割合が 1 週間の勤務時間数と逆相関する事を発見した。CD56+cell の割合低下には長時間労働と睡眠時間低下関係していた。

文献 ID 67

1 著者

内山 集二、倉沢 高志、関沢 敏弘、中塚 比呂志

2 タイトル

降圧剤治療を受けている 50 歳代男性労働者における脳心事故の危険因子

3 掲載誌

産業医学 Jpn J Ind Health 34: 318-325, 1992

4 対象

1985 年～1988 年の間、民医連血圧追跡調査会参加の全国 123 の医療機関に、通院している高血圧患者のうち、降圧剤服用者で、一年以上通院しており、脳卒中・心筋梗塞・心不全・腎不全・癌がなく、ステロイド・インスリン未使用者で、かつ 50 歳～59 歳の男性で 1 日拘束時間 7 時間以上の 899 人に 1 人平均 2.8 年で前向き追跡調査をおこなった。

5 結果

高血圧治療を受けている 50 代男性患者において管理職と長時間拘束(11 時間以上)は脳心事故の発症の独立した危険因子であることが示唆された。また、多変量解析の結果では、労働関連因子の他に、BMI 20 未満のやせ、心電図による心肥大や ST-T 変化、1 日 9 時間以上の長い睡眠、BMI28 以上の肥満、及び喫煙が、脳心事故の有意な危険因子であった。

6 要約

目的：労働因子と脳心事故の発症の関連性を明らかにすること。

デザイン：前向きコホート研究

セッティング：民医連高血圧追跡調査参加の全国 123 の医療機関。

対象：1985 年～1988 年の間、民医連血圧追跡調査会参加の全国 123 の医療機関に、通院している高血圧患者のうち、降圧剤服用者で、一年以上通院しており、脳卒中・心筋梗塞・心不全・腎不全・癌がなく、ステロイド・インスリン未使用者で、かつ 50 歳～59 歳の男性で 1 日拘束時間 7 時間以上の 899 人を対象。

主な結果指標：因子あり群と対照群で別々に脳心事故発症率を求め、それらのオッズ比を求め、有意差を検討。またこれら因子間の Pearson の相関係数を求めた。長時間拘束群と対照群の諸因子保有率の差は正規分布の統計値 z 値により両側検定を行った。多

変量解析による相対危険度は、SAS を使って Cox の比例ハザードモデルで求めた。

*用いた因子について：一日拘束時間 11 時間以上を「長時間拘束」、6 人以上の企業の部長以上の職を「管理職」、2 週間に 1 日以下の休日を「少ない休日」、仕事や職場のことでストレスがたまることが「よくある」、「時々ある」を「仕事のストレス感あり」、午後 10 時から翌日 5 時の間の仕事を「深夜労働」、以上が労働因子。睡眠時間 9 時間以上を「長い睡眠」、6 時間以下を「短い睡眠」とし、7-8 時間を対照とした。起床時の「疲れている」、「非常に疲れている」、「非常に疲れている」を「朝の疲労感あり」とし、たばこは「吸っている」を「喫煙あり」とし、「吸わない」、「やめた」を対照とした。アルコールは日本酒に換算して 1 日 2 合以上を「飲酒あり」とした。血圧は収縮期血圧 160mmHg 以上を「収縮期血圧管理不良」とし、拡張期血圧 95mmHg 以上を「拡張期血圧管理不良」とした。肥満度は、BMI 20 未満を「やせ」、28 以上を「肥満」、20.0-27.9 を対照とした。心電図の因子は、「心肥大、ST-T 変化あり」とし、どちらでもないものを対照とした。血清総コレステロールは 240mg/dl 以上を「コレステロール高値」とし、160-239mg/dl を対照とした。以上のうち対照の記載のない因子は、因子に該当しないものを対照とした。

文献 ID 68

1 著者

久保 進、岡 浩之、池田 聡司、松永 和雄、浅井 貞宏、宮原 嘉之、河野 茂

2 タイトル

急性心筋梗塞の発症時の状況と誘因

3 掲載誌

呼吸と循環 45(9): 887-891, 1998

4 対象

対象は、急性心筋梗塞患者 132 名(平均年齢 64.2 ± 7.1 歳)、内訳は男性 101 名(年齢 35-84 歳、平均 62.5 ± 7.5 歳)、女性 31 名(年齢 59-78 歳、平均 68.3 ± 4.4 歳)。男性は、仕事の関係を考慮して 65 歳以下 60 例と 66 歳以上 41 例の 2 群に分け、女性は 1 群として、計 3 群で、アンケート調査の結果を比較検討。

5 結果

発症時間は、午前 10 時から 12 時までの時間帯が最も多かった。65 歳以下の男性では、労作中の発症(52%)は、睡眠中(25%)や安静中(15%)に比べて明らかに効率であった($p < 0.05$)。66 歳以上の男性では睡眠中、労作中や安静中の割合はほぼ同じで、女性では労作中の割合がやや高率であった。発症した場所は 65 歳以下の男性では、自宅と自宅外が同率で、66 歳以上の男性と女性では自宅で発症する割合が高かった。発症した誘因として、65 歳以下の男性は仕事のストレス、酒、喫煙、不規則な生活など複数の要因をあげた患者が多かった。66 歳以上の男性では喫煙が多く、女性では過労や配偶者の病気に伴うストレスが目立った。

6 要約

目的:急性心筋梗塞の発症前および発症時の状況についてアンケート調査を行うことにより、状況や誘因を明らかにする。デザイン:断面研究。セッティング:佐世保市立総合病院内科に通院中の心筋梗塞発症後の患者。対象:急性心筋梗塞患者 132 名(男性 101 名、女性 31 名)。方法:男性は 65 歳以下 60 例と 66 歳以上 41 例の 2 群、女性として 1 群、計 3 群でアンケート調査の結果を比較検討。アンケートの質問事項は、①発症時刻、②発症時の状況、③発症した場所(睡眠中、労作中、安静中)、④発症の仕方(突然か、徐々か)、⑤発症前 1 週間の状況(仕事、睡眠、食事、ストレス、禁煙)、⑥発症の

直接の誘因等の項目で、ストレスと発症の直接の誘因については自由回答とした。

主な結果指標：各質問に対して、65歳以下の男性の群、66歳以上の男性の群、女性の群での頻度をそれぞれ算出し、頻度の比較を χ^2 乗検定で有意差を判定。

今後の展望：65歳以下の男性では、日常生活の管理や虚血性心疾患の啓蒙教育により、急性心筋梗塞の予防ができる可能性が考えられた。

文献 ID 69

1 著者

倉沢 高志、内山 集二、関沢 敏弘、中塚 比呂志

2 タイトル

高血圧患者の睡眠時間と脳心事故

3 掲載誌

内科 71(2): 349-352, 1993

4 対象

1985年～1988年の間、民医連血圧追跡調査会参加の全国123の医療機関に、通院している高血圧患者のうち、降圧剤服用者で、一年以上通院しており、脳卒中・心筋梗塞・心不全・腎不全・癌がなく、ステロイド・インスリン未使用者で、かつ50歳～75歳である6,825人に対して平均2.66年の前向き追跡調査を行った。

5 結果

50～69歳においては、9時間以上睡眠群と5時間以下睡眠群は6～8時間睡眠群より脳心事故が有意に多く、特に長時間睡眠群は男女別に検討しても有意差がみられ、J型カーブを呈した。70歳以上では、そのような関連はなかった。

6 要約

目的：Kripkeらが(睡眠時間と脳卒中や心筋梗塞の発症率との間に密接な関連性を明らかにし報告している)報告している睡眠時間と脳心事故(脳出血・脳梗塞・くも膜下出血・心筋梗塞・心不全・大動脈瘤破裂・急死)発症率との関連性が日本の高血圧患者についても当てはまるかどうか検討すること。

デザイン：前向きコホート研究

セッティング：民医連高血圧追跡調査参加の全国123の医療機関。

対象：民医連高血圧追跡調査参加の全国123の医療機関に、降圧剤服用者で、1年以上通院しており、脳卒中・心筋梗塞・心不全・腎不全・癌がなく、ステロイド・インスリン未使用者という条件を満たす高血圧患者のうち、50歳～75歳までの6,825人を対象。

主な結果指標：脳心事故発症率を6～8時間睡眠を対照群として5時間以下睡眠群、9時間以上睡眠群の3群にわけ、脳心事故発症率の差を検討。

文献 ID 70

1 著者

志渡 晃一

2 タイトル

心筋梗塞に罹りやすいライフスタイルに関する症例・対照研究

3 掲載誌

北海道医誌 70(6): 795-805, 1995

4 対象

札幌市を含む道央圏に在住し、北海道大学医学部附属病院循環器内科およびその関連病院において、臨床的所見に加えて冠動脈造影によって心筋梗塞と診断された 70 歳未満の男性確実例 56 名の症例と、年齢(±3 歳以内)および居住地域をマッチさせた男性 112 名の対照。

5 結果

心筋梗塞の発症に深く関わりと考えられるライフスタイル因子では、(1)野菜サラダを食べない、(2)テレビの健康番組をみない、(3)和菓子を好む、(4)食事時間が不規則、(5)仕事の話を家族にしない、(6)睡眠時間が不規則の 6 変数が独立性が高く、また変数が複数に増加するにつれてオッズ比は飛躍的に高まった。

6 要約

目的：わが国における心筋梗塞の発症関連要因の特性に配慮し、症候・検査レベルの危険要因の形成を促進するライフスタイルの構造を定量的に評価し、一次予防に焦点をあて、日常の保健教育・保健指導に实际的に役立つ対策を立てるための基礎資料を得ること。

デザイン：症例対照研究

セッティング：北海道大学医学部附属病院循環器内科およびその関連病院

対象：心筋梗塞と診断された 70 歳未満の男性確実例 56 名の症例群と、年齢(±3 歳以内)および居住地域をマッチさせた健康な男性 112 名の対照群。

主な結果指標：心筋梗塞の発症に深く関わりと考えられるライフスタイルとして、(1)食品摂取・食嗜好・食行動、(2)飲酒・喫煙、(3)労働環境・社会生活行動、(4)保健行動・余暇・生活習慣の 4 分野に分け、分野ごとに独立性の高い 14 変数を検出。最終的に独

立性の高い6変数を検出し複合オッズ比を算出。

* 14変数

(1)食品摂取・食嗜好・食行動

- ① 和菓子を好む
- ② 野菜サラダを食べない
- ③ 食事時間が不規則

(2)飲酒・喫煙

- ① 飲酒をしない
- ② 過度に飲酒する
- ③ タバコを1日に30本以上吸う

(3)労働環境・社会生活行動

- ① 1日の勤務が連続10時間以上に及ぶ
- ② 仕事の話を家族にしない
- ③ 熱中すると気持ちの切替ができにくい
- ④ 涙もろい

(4)保健行動・余暇・生活習慣

- ① テレビの健康番組を観ない
- ② 健康に関する新聞記事を読まない
- ③ 余暇にテレビを観て過ごすことがない
- ④ 睡眠時間が不規則

文献ID 71

1 著者

齊藤 良夫

2 タイトル

循環器疾患を発症した労働者の発症前の疲労状態

3 掲載誌

労働科学 69(9): 387-400, 1993

4 対象

1991年10月から約1年間、働いている夫または子供(男子)が職場や自宅で、または出張中などに発病し、死亡ないしは労働不能の状態になるか、または自殺したためにその労働災害認定の相談に「過労死110番」に連絡をしてきた妻または母親17名を対象とした。

5 結果

循環器疾患を発症させた対象者の半数以上の者に長時間残業や休日出勤が共通してみられること、さらに通常の職務の他に新しい職務を遂行しなければならないことや責任を問われるという、重複負担状況が併せてみられることが分かった。そして多くの発症者は発症前3ヶ月頃から著しいだるさ感や疲労感を被面接者(妻又は母親)に訴えていたことが明らかになった。また彼らの多くが休日には睡眠中心の生活をしていることも明らかになった。

6 要約

目的：産業疲労研究の立場から心筋梗塞などの循環器疾患を発症させた労働者がその発症前にどのような疲労状態であったかを明らかにすること。

デザイン：症例報告。

セッティング：東京及び全国の「過労死を考える家族の会」を通して紹介を得たものの中から面談の対象者を選出。

対象：1991年10月から約1年間、働いている夫または子供(男子)が職場や自宅で、または出張中などに発病し、死亡ないしは労働不能の状態になるか、または自殺したためにその労働災害認定のために相談に「過労死110番」に連絡をしてきた妻または母親17名を対象。

主な結果指標：発症者の疾病の発症状況、労働状況や勤務状況、平日や休日の生活状

況、及び勤務日の帰宅後や休日における疲労感の表出、休日や睡眠に関する行動等を約2～3時間の面接で対象者から聴取した。その結果から、発症者に関する労働負担要因を抽出して、該当する人数が多いものを発症要因とした。

*労働負担要因：(1)1日12時間以上の労働(3日以上/週)：12人、(2)新しい任務・責任増大：10人、(3)休日(土曜日)出勤(または自宅での仕事)：9人、(4)期限の切迫：8人、(5)頻繁な出張(海外出張を含む)：5人、(6)昇進・昇格：3人、(7)重量物運搬：3人、(8)転職・配置転換：2人、(9)長距離車両運転：2人、(10)頻繁な接待：2人

文献ID 72

1 著者

武正建一、田島治、大滝純一、佐々木浩美、佐々木直子、杉山卓生、岡田道雄

2 タイトル

急性心筋梗塞患者におけるリスク・アセスメント (二) -心理的ストレスを中心に-

3 掲載誌

厚生省・精神疾患研平成3年度研報心身症の発症機序と病態に関する研究 : 101-106, 1992

4 対象

1990年10月～12月および1991年10月～12月に杏林大学病院救命救急センターに搬入された急性心筋梗塞患者40名。対照群は年齢、性差を一致させた同時期の内科病棟入院患者17名。

5 結果

心筋梗塞群では、血中アドレナリンと総コレステロールの高値、PSRSで非現実的願望のスコア高値、JASで60%がタイプAとなった。仕事量の増加はタイプBに多かった。

6 要約

目的:急性心筋梗塞の発症と直前の心理的ストレス、発症における引き金因子の関与、タイプA行動パターンとの関連を明らかにする。 デザイン:症例報告。 対象:1990年10月～12月および1991年10月～12月に杏林大学病院救命救急センターに搬入された急性心筋梗塞患者40名。対照群は年齢、性差を一致させた同時期の内科病棟入院患者17名。 主な結果指標: Jenkins Activity Survey (JAS) による行動パターン、心理的ストレス反応尺度(PSRS)、血中アドレナリンと総コレステロール。

文献ID 73

1 著者

田中平三、中山健夫、横山徹爾、吉池信男

2 タイトル

壮年群・高齢群での脳血管疾患リスク・ファクターの相違とその「人口寄与危険度割合」

3 掲載誌

神経疾患及び精神疾患発症要因に関する疫学的研究 平成6・7・8年度総括研究報告書：84-85, 1997

4 対象

新潟県新発田市 A-I 地区の 40 歳以上、脳卒中有病者以外の住民 2302 名。

5 結果

壮年群では心房細動の相対危険度が最大で、高血圧、喫煙が続く。後 2 者は保有率が高いため、全体への寄与の大きさは心房細動と逆転する。高齢群では心房細動の相対危険度のみが有意となるが、壮年群よりは小さい。

6 要約

デザイン：コホート研究。対象：新潟県新発田市 A-I 地区の 40 歳以上、脳卒中有病者以外の住民 2302 名。結果：1999 年 12 月まで 15.5 年間の追跡期間中の新発症症例数は、脳出血 27 例、脳梗塞 76 例、くも膜下出血 11 例、分類不能 28 例の計 142 例(CT 施行率 46%)であった。壮年群では年齢以外では心房細動の相対危険度が最大で、高血圧、喫煙が続く。後 2 者は保有率が高いため、全体への寄与の大きさは心房細動と逆転する。高齢群では心房細動の相対危険度のみが有意となるが、壮年群よりは小さい。

文献ID 74

1 著者

田辺直仁、豊嶋英明、林千治、宮西邦夫、小幡明博、佐伯牧彦、山本朋彦、尾崎信紘、田中吉明、相崎俊哉、和泉徹、柴田昭

2 タイトル

急性心筋梗塞症発症に与えるストレスの影響

3 掲載誌

日循協誌 28: 50-56, 1993

4 対象

新潟県内 8 病院で初めて心臓カテーテル検査を施行され 75%以上の冠動脈狭窄を認めた男性心筋梗塞・狭心症患者のうち、1984 年から 6 年間の 40 歳以下 45 例、1989 年 4 月から 1 年間の 40-60 歳の 99 例。

5 結果

「競争心」「ストレス」は AMI、他の慢性冠動脈疾患(CCD)とも対照群に比べ高率で、両群間に差はない。「睡眠時間減少」は AMI 症例群のみ対照群・CCD 症例群に比べ高率であった。

6 要約

目的：社会心理因子(ストレス,性格,A 型行動様式)は AMI など心事故の引金か、冠動脈硬化の促進因子かの解明。デザイン：AMI、CCD 各症例群と各対照群を比較する症例対照研究。対象：症例群は新潟県内 8 病院で初回心カテ検査を施行され 75%以上の冠動脈狭窄を認めた男性 AMI・狭心症患者のうち、1984 年から 6 年間の 40 歳以下 45 例、1989 年 4 月から 1 年間の 40-60 歳 99 例。対照群は 1989 年 5 月の健診受診者男性から年齢をマッチさせ 2 例ずつ抽出。主な結果指標：各要因のオッズ比。

文献 ID 75

1 著者

豊嶋英明、田辺直仁、林千治、和泉徹

2 タイトル

疫学調査から見たストレスと突然死 -男性症例における年齢別検討-

3 掲載誌

日本災害医学会会誌 43: 487-492, 1995

4 対象

1988年4月より2年間、新潟大学第一内科関連19病院における15歳以上男性の突然死(SD)139例、急性心筋梗塞(AMI)後24時間以上生存した189例。

5 結果

若年SDにはストレスと睡眠減少、AMIにはストレスと競争心が正の相関を示した。老年では睡眠減少がAMIに関与し、競争心は関与しない。既往歴はAMI群はHTやDM、SD群は循環器系器質疾患が高率だった。

6 要約

目的：男性(若年・老年)の致死的不整脈あるいはAMIに対するストレスならびに関連する要因(睡眠減少,競争心,喫煙,飲酒)の影響と既往疾患の役割の検討。デザイン：症例対照研究。対象：症例群は1988年4月より2年間、19病院における15歳以上男性のSD139例、AMI後24時間以上生存した189例。若年対照群は1989年に健診を受診した60歳以下の男性郵政職員424名。老年対照群は新潟県内某農村で住民健診を受診した61歳以上男性304名。主な結果指標：各要因のオッズ比。

文献 ID 76

1 著者

長田尚彦、田辺一彦、大宮一人、山本雅備、野田聖一、伊東春樹、村山正博、須階二郎

2 タイトル

睡眠不足状態における心肺機能についての検討

3 掲載誌

日本臨床生理学会雑誌 23: 517-523, 1993

4 対象

心疾患, 腎疾患, 肺疾患, 高血圧などの既往歴を持たない 18-26 歳の健常人 14 人(男性 11 人, 女性 3 人, 年齢 21.4 ± 2.1 歳, 身長 166.9 ± 7.0 cm, 体重 60.3 ± 9.5 kg)

5 結果

睡眠不足時の運動耐用能低下要因として、心拍数減少、SI 減少によると思われる心拍出量の減少が関与していると考えられた。

6 要約

目的：睡眠不足時の心肺運動負荷時動態の検討。方法：十分な睡眠の日をコントロール、3 時間以内に制限された日を睡眠不足時とし、両日間の差を比較。対象：18-26 歳の健常人 14 人(男性 11 人, 女性 3 人, 年齢 21.4 ± 2.1 歳, 身長 166.9 ± 7.0 cm, 体重 60.3 ± 9.5 kg)。主な結果指標：VO₂, 心拍数, 心係数(CI), 一回拍出係数(SI)。

文献 ID 77

1 著者

中西 範幸、中村 幸二、高田 豊子、宇都 エリ子、下長 牧子、金子 隆一、多田羅 浩三

2 タイトル

壮年期の男子勤労者の高血圧発症と関連するライフスタイルについての研究

3 掲載誌

厚生指標 46: 18-23, 1999

4 対象

大阪市に本社を有するT工務店の1994年5月において35-54歳の事務系男子従業員1,367人

5 結果

中年期の勤労者において肥満と飲酒は高血圧発症に密接な関連を有する。一方、長時間労働は高血圧発症を引き起こす要因とはならないことが示唆された。

6 要約

目的:職域における定期健康診断の成績をもとに高血圧の発症と関連するライフスタイルの要因を明らかにすること。

デザイン:コホート研究。

セッティング:上記工務店における1994年5月-1997年5月の定期健康診断。

対象:上記のうち降圧剤の服用および高血圧の既往がなく正常血圧を示した949人。

主な結果指標:コックスの比例ハザードモデルにより求めた高血圧の発症に対するライフスタイルの各要因(喫煙,飲酒,体重,朝食,間食,栄養バランス,運動,労働・睡眠時間)のハザード比(年齢調整,多変量解析)。10時間以上の長時間労働と関連する要因について検討したオッズ比。

文献ID 78

1 著者

中山 敬三、清原 裕、加藤 功、岩本 廣満、上田 一雄、藤島 正敏

2 タイトル

一般住民における肥満に伴う合併症と生命予後：久山研究

3 掲載誌

日本老年医学会雑誌 34: 935-941, 1997

4 対象

1973年-1974年に行われた久山町の成人健診の受診者から設定した40歳以上のコホート2,053名

5 結果

肥満度と生命予後の関係はU字型を示し、男女ともBMI23-25のレベルで死亡率が最も低かった。肥満群では脳卒中及び心筋梗塞の死亡率が高く、やせの群では肺炎とその他の死亡率が高かった。

6 要約

目的：肥満度のレベル別の他の心血管病危険因子の頻度の比較と肥満度が生命予後に及ぼす影響の検討。デザイン：コホート研究。セッティング：久山町の成人検診結果および臨床記録、剖検所見。対象：上記2,053名（男854名、女1,160名、外因死39名）。主な結果指標：BMIレベル別の性別・年齢調整危険因子の頻度。同じくBMIレベル別の性別・年齢調整総死亡率と死因別の死亡率。

文献ID 79

1 著者

半田 肇、西川 方夫

2 タイトル

ストレスと脳卒中発生の因果関係に関する研究

3 掲載誌

日本災害医学会会誌 35: 246-254, 1987

4 対象

A群：業務上認定のため東海、北陸各県の労働基準局が過去5年間に受けた労災保険給付事案15例、B群：1986年1月より脳卒中にて浜松労災病院脳神経外科にて入院加療を受けた患者のうち就業中に発症した症例

5 結果

責任、精神的負担の増大や不規則な業務時間によるストレスが発症要因として多く、また家庭外のストレス要因も多かった。基礎疾患として高血圧症を有する例が多かった。発症直前に身体の不調を訴えた例も多かった。

6 要約

目的：過度のストレスが脳卒中発症にどの程度関与するかを検討すること。デザイン：症例報告。セッティング：各労働基準局職員の調査面談資料、発症前の健康診断表、入院カルテおよび電話によるアンケート。対象：上記A、B、C群。主な結果指標：各群における発症要因を有する症例数とその割合。